

序

頸部の腫瘍を訴えて来院する患者が、以前より多くなったように思う。高齢者ばかりでなく、成人にも小児にも多い。頸部腫脹や腫瘍には炎症もあり腫瘍もある。炎症ならば多くの場合抗生物質で解決するであろうが、炎症症状が明確でないときは、腫瘍ではないかと気にしながら経過を追うことになる。

頸部腫瘍の報告は本誌でも多くなっており、甲状腺腫瘍なども散見される。検査方法にも進歩がみられ、超音波診断を始めとし器機の開発も目覚ましい。しかし腫脹や腫瘍の診察には、まず視診、触診を、慎重に丁寧に行うことから始めるのが大切であろうという観点から今回の特集が企画された。

頸部の疾患、特に腫瘍は耳鼻科だけでなく、他科との境界領域でもあるので、広く、耳鼻科以外の諸先生にも執筆をお願いした。本書を熟読することにより、頸部腫瘍の考え方、視診、触診を始めとした診断の進め方、さらに治療、手術手技まで理解することができ、日常臨床に大いに役立つであろう。

ここに、原稿をお寄せ頂いた諸先生に深甚の謝意を表するものである。

(編集委員)